



国宝 御上神社本殿

滋賀県教育委員会 文化財保護課
主任技師 菅原和之

御上神社の沿革

琵琶湖の東方、野洲の平原にひときわ目立つ三上山は、別名を近江富士とも呼ばれ、美しい姿とともに依^{たわらとうだ}藤太のムカデ退治の伝説でもよく知られています。山頂部には巨大な岩石によって雄山と雌山の双頭をなし、それは磐座として古代から信仰の対象とされてきました。御上神社はこの三上山の西麓に鎮座し、祭神を天御影命^{あめのみかげのみこと}としますが、古くは三上山そのものを神体山として崇めておりました。

当社の発祥は、社伝によれば、国土開発の祖といわれる天御影命が三上山に降臨したのを御上祝^{みかみのほりまつ}が祀ったことにはじまり、のち養老2年(718)に藤原不比等が勅命をうけて現在の地に社殿を造営したと伝えています。その後、平安時代初めには神威が強く現われて朝廷の尊崇を受け、にいたり、大同元年(806)には封二戸^{ふうにこ}を充てられ、貞観元年(859)には従五位上^{じゅうごいじょう}、同17年に従三位に進み、さらに延喜式^{えんぎしき}の制定(927)におよんで名神大社^{なみょうじん}に列しました。

社殿の造営に関しては史料を欠いていますが、現在の本殿、拝殿、楼門はいずれも中世の建立と認め

られ、この三棟が軸線上に並んでいます。

御上神社の指定建造物一覧

指定区分	名称	建立年代
国 宝	御上神社本殿	鎌倉時代後期
重 文	御上神社拝殿	鎌倉時代後期
重 文	御上神社楼門	康安5年(1365)
重 文	御上神社撰社 若宮神社本殿	鎌倉時代後期
県 指 定	御上神社撰社 三宮神社本殿	室 町 時 代

御上神社本殿の概要

本殿の建立年代を考察する史料としては、南東隅の縁束^{えんづか}をうける礎石^{せんいし}に建武4年(1337)の刻銘が確認されていますが、この刻銘が建



国宝 御上神社本殿

立年代を示すものであるのか、もしくは縁および向拝まわりの修理の年代を示すものであるのか明確ではなく、様式手法から鎌倉時代後期（1275～1332）の建立とされています。

本殿の概要は、方三間（正面・側面とも柱間が三つあること）に屋根は入母屋造（上部は前後二方に勾配を有し、下部は四方へ勾配を有する屋根形式）、正面中央に柱間一間分の向拝（正面階段およびその前の床部分に張り出した庇）が付き、檜皮葺（檜の皮を重ねて葺いた屋根）で、南を正面として建てています。

御上神社本殿の規模(主要寸法)

正面柱間(桁行)	6.96m
側面柱間(梁間)	6.96m
向拝柱の出	3.07m
軒の出	1.85m
軒高	3.83m
棟高	8.48m
平面積	48.40㎡

本殿についてももう少し詳しく説明しますと、まず、平面では、柱はすべて円柱を使い（向拝の柱は除く）、正面、側面のそれぞれの柱間がすべて等間隔のため正面側の柱間と側面側の柱間が等しい正方形の平面で、内部は中央に四本の柱を側通り（建物の外側の柱通り）の柱間よりやや広くとって立てています。組物（柱上で軒を支える部分）は側通り四隅の柱上に舟肘木（舟形の横材。柱上に乗って桁を支える）を置くだけの簡素なもので、軒は二軒繁垂木（軒を支える垂木が二段で構成されるもの）です。妻飾り（屋根側面の三角形の部分の装飾）は豕扱首組（材を合掌形に組み、中央に扱首竿が垂直に立って化粧棟木を支える形式）、屋根は入母屋造檜皮葺で大棟に千木（もとは妻の合掌形の板が延びて屋根面を突き出したものですが、後世には御上神社本殿のように大棟の上に置く形式となりました）と堅魚木（もとは茅葺屋根の棟を固める縄を保護するものですが、後世には御上神

社本殿のように装飾化しました）を置きます。正面中央、背面中央と西面前寄りに板扉を開き、西面中央、東面前寄りには連子窓（細い角材を一定の間隔を取って縦に並べた窓）を付けます。正面と両側面にのみ高欄付きの縁をめぐらし、縁東を受ける礎石に連華座（蓮弁の彫刻）をつくり出しています。内部は、まず、中央の四本柱部分の正面に板扉を設け他の三面を板壁としてその中を内陣とし、さらにその周囲は外陣としています。また、現在は、内陣後方の柱筋から左右に板壁が延び

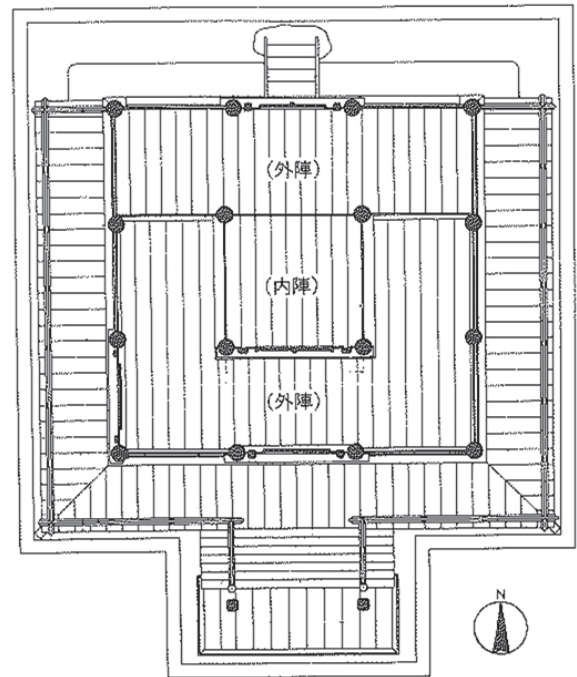


図-1 国宝 御上神社本殿平面図

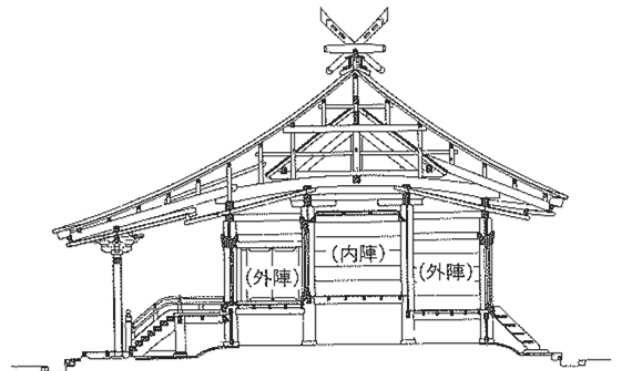


図-2 国宝 御上神社本殿梁行断面図

て外陣を前後に仕切っています。内陣の床は外陣より一段高く、天井を小組格天井（角材を縦横に組んでできたそれぞれの格子の中にもさらに小さい格子を組み入れた天井）とし、外陣はすべて化粧屋根裏（天井を張らず軒を支える垂木が見えた状態）としています。

向拝は面取角柱を立て浜床（階段下の床）を設け、木階（木造の階段）を七段据えて木階両脇に登り高欄を設けます。柱上では頭貫（柱頂を繋ぐ横材）を通し、柱上の組物は連三斗組（肘木上に四角い斗を三つ並べる三斗組の一方にもう一つ斗が乗ったもの）で、手挟み（柱上部組物の内側に付いた装飾部材）付き、頭貫中央には臺股（下方が開いて蛙の股のような形をした、上方の荷重を支える部材）を飾ります。

御上神社本殿の特徴

本殿のおよその構造形式については前述しましたが、この本殿はその外観や平面形式から仏教建築の影響を強く受けた神社建築として一般的に知られていますので、次にそのことについて触れたいと思います。

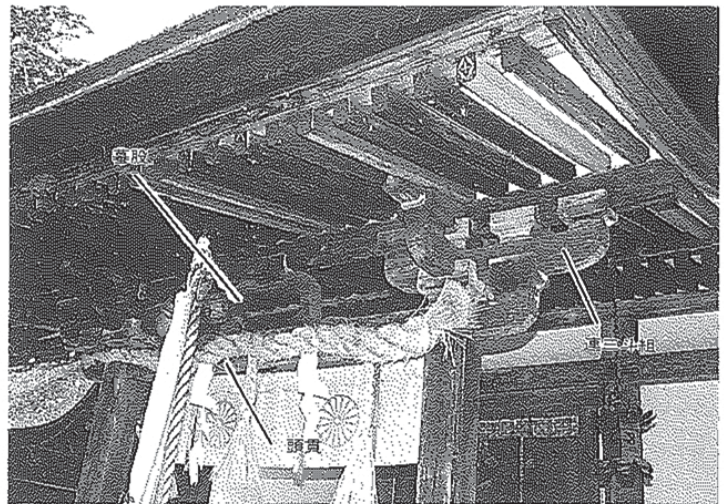
まず外観については、屋根が入母屋造であることや漆喰壁、連子窓などが仏教建築によくみられる要素としてあげられます。

次に平面形式については、方三間の内部中央に四本の柱が立ち、これは構造からみると中央の四本柱部分の周囲に一間幅の庇を付けた形式で一間四面堂と呼びます。このように正方形または長方形の中心部分の周囲に一間幅の庇を廻した形式は一般に仏教建築にみられるもので神社本殿としては特異な形式です。

神社の本殿は本来、御神体を安置するための建物であって、本殿のなかで祭祀が行なわれるものではなく、前面に神饌等を捧げるための外陣が付加することがあっても、内陣の



国宝 御上神社本殿正側面全景



国宝 御上神社本殿向拝まわり詳細

左右や背面にまでは庇は必要ありません。図-3は代表的な流造本殿である国宝苗村神社西本殿（滋賀県竜王町）の平面図ですが、これと御上神社本殿の平面図を比較すると、苗村神社西本殿では内陣の前にのみ外陣が付きますが、御上神社では内陣の四方に外陣が廻っていることがわかります。

先に、こうした平面形式は仏教建築にみられると書きましたが、一例として図-4に重要文化財延暦寺常行堂（滋賀県大津市）をあげました。この建物は御上神社本殿と比較して一回り規模が大きく、中央三間四方の周囲に幅一間の庇を付けたものです。この建物では僧が弥陀の名号を称え内陣周囲を歩行する常行三昧の行をおこなうため、周囲の

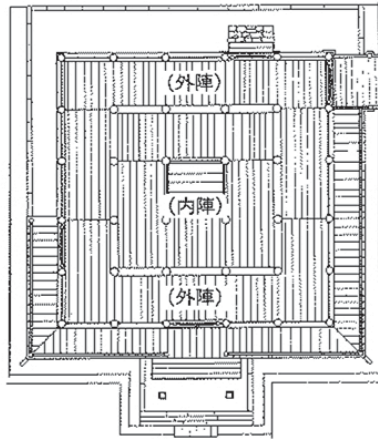
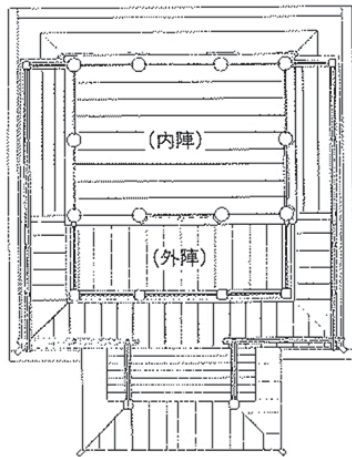


図-3 国宝 苗村神社西本殿平面図 図-4 重要文化財 延暦寺常行堂平面図

であるばかりでなく、本殿であった時の壁や縁の痕跡、更に内陣中央の四本の柱の痕跡が残っていることから、平面ももとは本殿と同様であったと考えることができます。御上神社に行かれた際はぜひ拝殿にも目を向け、本殿と比較していただきたいと思います。

庇は必要不可欠なものです。御上神社本殿にはこのように周囲に外陣を廻す必要性はなく、その特異な平面構成は、その外観とあいまって仏教建築からの強い影響を受けたことによるものと考えられています。なお、前述のとおり、現状は内陣後方の柱筋から左右に板壁が伸びて外陣を前後に仕切っているため背面側の外陣へは背面中央の扉からしか出入りができませんが、この板壁は納まりに不自然な点があり、これは後世に改造されたものと考えられています。すると、もとはより延暦寺常行堂に近い平面構成であったことがわかります。

以上、本殿の主な特徴について触れましたが、この特徴を仏教建築の影響とする考えは、一般的な見解として述べられていることで、これとは異なり、拝殿が本殿化したためとする考えもあります。つまり御上神社本殿の成立過程については、まだ明確にはわかっていないのです。しかし、いずれにせよこの本殿は神社建築史においてもまた鎌倉時代の人々の信仰の形態を探るうえでも貴重な建築であるといえます。

ところで、この本殿の前には方三間吹き放しの拝殿が建ち、様式的にみて本殿よりも古いと考えられています。そして、この拝殿は、旧本殿という言い伝えがあります。それは拝殿の外観および規模が国宝の本殿とほぼ同じ

註① 滋賀県内の中世（鎌倉・室町時代）の重要文化財指定神社本殿は平成6年11月現在44棟あり、これを構造形式別に分類すると流造が36棟で圧倒的な数を占めています。また他の構造形式の本殿の平面形式は基本的に流造と同一のもので、一般的によく行なわれた平面形式であったことがわかります。

(参考)

構造形式別棟数

ながれづくり	かすがづくり	いりもやづくり	
流造 36棟	春日造 2棟	入母屋造 3棟	
きりつまづくり			
切妻造 3棟			合計44棟

(御上神社本殿は構造形式別では入母屋造に分類されます)。



重要文化財 御上神社拝殿

滋賀文化財教室シリーズ No.145号

発行年月日 1994年11月21日
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
 〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
 TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525